

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。(Since 2006)

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	2

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「桜のある水辺風景 2019」募集中です！

只今、大募集中です。みなさん、是非ご応募ください。Eメールでご応募の場合は、タイトル欄を「桜のある水辺風景 2019 応募」とし、本文に下記の情報を記入の上、写真と共に info@a-rr.net までお送り下さい。

- ①氏名
- ②題名
- ③撮影年月
- ④撮影場所
→河川・水辺の名称、都道府県・市町村名
- ⑤写真コメント
- ⑥E メールアドレス
※ 1 通のサイズが 3MB 以下となるようにお願いします

その他、Facebook の投稿でも応募可能です。詳しくは下記をご参照ください。

- ・JRRN ホームページ
<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/1059.html>
- ・Facebook ページ
<https://www.facebook.com/sakuramizube/>
- ・公募ガイド ONLINE
<https://www.koubou.co.jp/contest/picture/photo/060546.html>

また、試験的に Twitter を開設しました。興味のある方は是非フォローをお願いします。

- ・Twitter
<https://twitter.com/sakuranomizube>

毎年、ご応募頂いた写真をもとに写真集を作成し、PDF で公開しております。過去の写真集はこちらからどうぞ。

・桜のある水辺風景写真集バックナンバー：

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/category/cherryphotos>



桜のある水辺風景2019 写真大募集

募集期間 2019年5月31日(金)まで

2018年応募作品

2019年「桜のある水辺風景」の募集を開始してから、今年で10周年を迎えました。Facebookや写真集を通じて紹介させて頂きました。皆様から北陸道まで、日本の水辺の魅力を引き出せるような素敵な水辺風景写真をお待ちしております。

桜のある水辺風景（2019年撮影の作品に限ります。）
①ご本人が撮影した写真に限り、②一人3点まで可。可成り多人数が特定できる人物画像が含まれる場合は被写体の方の了承を得てください。③過度な画像加工はご遠慮ください。

応募方法

Eメールでの応募
①氏名・住所・連絡先・作品名・撮影年月・撮影場所・写真コメントを記入し、②写真（JPEG形式）を添付し、③Eメール（info@a-rr.net）までお送りください。④1通のサイズが3MB以下となるようにお願いします。

Facebookでの応募
①「桜のある水辺風景」Facebookページにアクセスしてください。②「桜のある水辺風景」写真集から写真をアップロードしてください。③「桜のある水辺風景」写真集から写真をアップロードしてください。④「桜のある水辺風景」写真集から写真をアップロードしてください。⑤「桜のある水辺風景」写真集から写真をアップロードしてください。

注意事項
①Facebook及び写真集形式（PDFで6月公開予定）で紹介します。②応募作品を紹介する際には氏名を掲載します。③同一地区での類似した作品は事務局により写真集掲載を避けて頂く場合があります。④応募内容が本企画の趣旨に沿わないと判断した場合は紹介を控えさせて頂きます。⑤JRRNの刊行物やウェブサイト等で使用させて頂くことがあります。⑥応募作品は返却致しません。

※応募に関する詳細情報はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/1059.html>

主催：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 応募先・問合せ先：info@a-rr.net 

2019 年度版チラシ

(JRRN 事務局・阿部充)

4 月



撮影：2018 年 2 月（富山県高岡市 野村）



あの日のあの川 リレー日記 ～第 43 話～

あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第 43 話主人公 片岡永理奈

（筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川（直）研究室『川と人』ゼミ）

（■川ガール・□川系男子）

（出身地を流れる川：富山県庄川）

「思い出」

いつのこと？：小学生～高校生

どこの川？：庄川

富山県は自然豊かなところで、その名の通り山に富む県であり、同時に川に富む県でもあります。県内には、イタイタイ病で有名な神通川や、日本でも有数の急流河川である常願寺川、ほかにも黒部川、片貝川、早月川、庄川、小矢部川が流れており、それらを総じて七大河川と呼びます。

学校では、その 7 つの川を西から順に覚えてテストをしたり、地域の歴史で川の水害や治水工事について学んだりしました。しかし、富山県が全国でも川で有名な県であることは、白川先生のゼミに入ってからようやくわかりました。これを機に、「川」という視点から地元について考えるようになりました。

今回は、幼少期や青年時代の川での記憶ということで、七大河川のうちの一つ、庄川について取り上げたいと思います。

小さいころ、よく庄川沿いの河川敷公園に連れてきてもらい遊んでいました。公園の中には遊具のほかに、子供たちが水遊びできる浅い池やバーベキュー広場、パークゴルフ場があり、休みの日には親子連れがたくさん見受けられました。夏には、地域のイベントでバーベキューをしたり、水遊びをしたり、それから公園内でアユのつかみ取りをしたこともあります。私の中で「庄川」といって、真っ先に思い浮かぶのは、自転車の練習をした記憶です。もちろん、練習したのは先ほど述べた公園の付近です。「川」とは直接関係ないのですが、はじめて補助輪を外して自転車に乗った場所だったので、これが庄川に関する思い出で一番濃いです。今回、この日記を書くにあたり、久しぶりにこの公園を訪れてみたのですが、公園から見える庄川の風景は以前とほぼ変わらず、とても懐かしい気持ちになりました。



撮影：2019 年 3 月（富山県 射水市）

ほかにも、庄川沿いでは、春には凧祭り、夏には花火大会が行われています。庄川の河川敷で毎年開催されている凧祭りでは、純粹に凧揚げを楽しみに来る人や、凧揚げ大会に参加して本気で競技しに来る人など、全国からたくさんの人々が集まります。そして、私も数年前にこの祭りに参加し、学校で作った凧を揚げました。大小、形、デザインさまざまな凧が、たくさん、大空を舞い、本当にきれいで活気と迫力であふれていました。

思い出し始めると、庄川で「川」として何か特別なことをしたわけではありませんが、生活風景の一部として、自分の成長過程における景色の一部として、私自身の記憶の中に庄川は存在するのだなあと思いました。

（次号は 6 月号にて近藤さんにバトンを託します）

JRRN 会員寄稿 (2) JRRN Member Contribution

水辺からのメッセージ No.119

岡村幸二 (JRRN 会員)

川に近づく窓辺：

川の景観スポットを探りながら 少しずつ川に顔を向けていく



撮影：2019年3月（和歌山県和歌山市・市堀川）

◆変わらないまちの水辺風景

和歌山市内の川のうち、和歌川、市堀川、大門川、真田堀川、有本川をまとめて「内川」と呼んでいます。これらの川が合流・分流を繰り返して、大きな水網ネットワークを形成しています。

◆かつては和歌山城の外堀として

江戸時代は和歌山城の外堀でもあった市堀川は、昔から商業・生活の賑わいの中心となっていました。市堀川沿いの遊歩道を歩くと、紀州特産の青石の石垣が残っています。また、川の景観スポットには、洒落たカフェや酒場が生まれており、小さな変化が今後続くことを期待したいです。

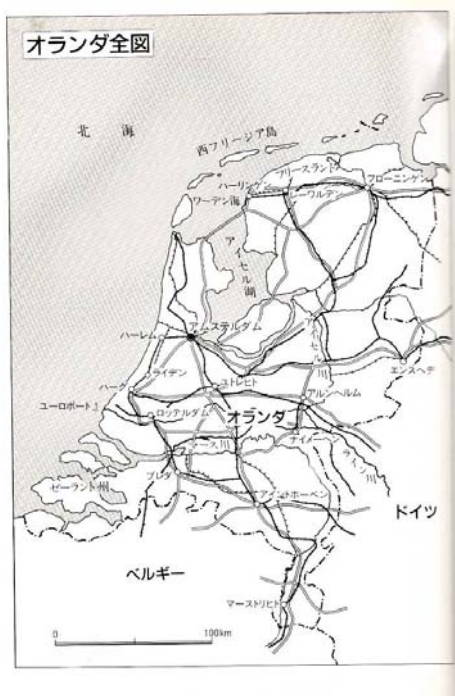
■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）

河川書の探求(12)

オランダの治水の歴史

古賀邦雄・古賀河川図書館 (JRRN 会員)



「オランダ全図:出典『オランダ水辺紀行』」

(1)長坂寿久著『オランダモデル』(日本経済新聞社・2000 年)によれば、治水の歴史がオランダの歴史であるとして、オランダの独特の合意形成システムは、どういう歴史的な経緯から生まれてきたのか、それは治水の歴史を背景にしているという。次のように述べられている。



①オランダの洪水の要因

オランダはアルプスを源流としてヨーロッパ大陸を流れる三つの川、ライン川、スヘルデ川、マース川が北海に注ぐ三角州にできた国である。アルプスの雪解けやヨーロッパ大陸への降雨によって、起こる三つの河川の洪水と、北海からの洪水によって、オランダの地形は絶えず変わってきた。

②水の制禦

ヨーロッパ大陸の人口の増加とともに、人々はやがてその低地にできた高台に住み始め、帆船の時代になると、北海に注ぐアムステル川に堤防(ダム)を造り、水を制御しアムステルダムという町を造り、ロッテ川にもダムを造って、ロッテルダムという町を造った。さらに堤防を築き、湖を干拓して国土を造成。今もオランダ人の三分の二の人々が海面下の土地に住んでいる。

③ウォーターボード(水域管理局)の組織

オランダには、今もウォーターボードという組織がある。これは堤防を保全し、水位を規定し、管理するための組織である。この組織はその後の本格的な水との闘いを通じて、オランダの文化を創造する原点となった。自分たちの堤防、埠頭、道路、水路などは、個人よりコミュニティで結束してつくる必要があった。

④排水システムのコミュニティ

排水システムの建設と維持は、各コミュニティの責任であったがゆえに、オランダには地域のコミュニティの自治が早く確立されていた。そして同時に各コミュニティはお互いの協力を必要とした。排水はいったん問題が起こると、お互いの協力を得て解決する必要があったからだ。こうした各コミュニティ間の協力関係は 13 世紀前半頃からあったという。

⑤干拓の発達

干拓技術の発達、人々に早くから「自由」の感情を育成したといわれる。干拓は自由な農民の参入を可能にし、新しい村が出来上がった。ウォーターボードは、既に 1250 年以前に各地のコミュニティで組織化され、1600 年にまさに自由な地方自治の行政体制として確立されていた。ウォーターボードが民主主義と NGO の原型となってきた。市とウォーターボードとは対等であるが、ウォーターボードの管轄は水域管理権のみである。

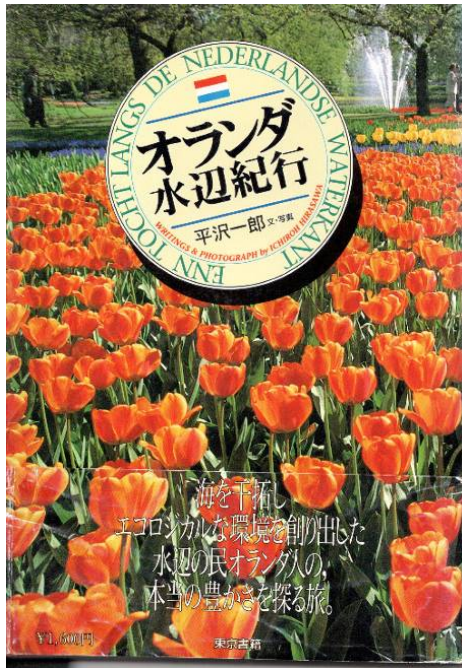
⑥大治水プロジェクトの導入

オランダは常に洪水の脅威に晒され、大きな被害を受け、

その都度海岸線が変形してきた。政府は治水・防水に向けて世界の最先端技術を駆使した大治水プロジェクトを導入した。

ゾイデル海干拓計画とデルタ計画である。この二つの大プロジェクトの成功によって、オランダは独特の文化的アイデンティティを確立した。1932 年 5 月、北ホラント州とフリースランド州を結び、北海とゾルデール海とを遮る 60 キロにわたる巨大な「締切堤防」が完成した。

(2)平沢一郎/文・写真『オランダ水辺紀行』(東京書籍・1995 年)により、もう少し、オランダの水との苦闘の歴史について、追ってみたい。

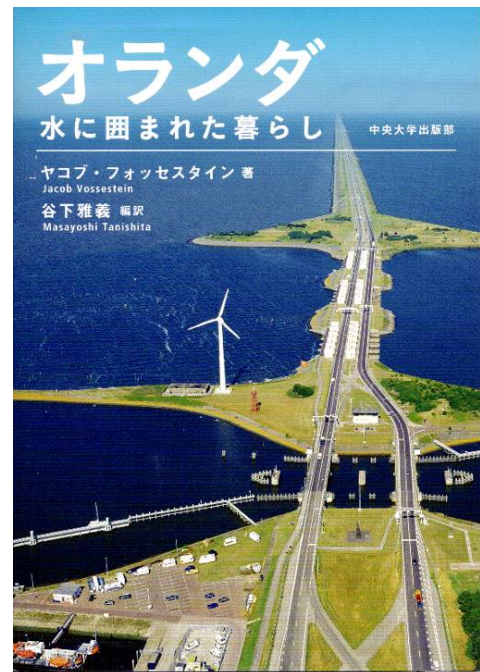


- ① オランダ人は、水辺の砂土を盛り上げて水に囲まれた「テルペン」と呼ばれる丘の上に住んでいた。テルペンをつくると、海流が少しずつ土砂をその周りに運んできた。次第に孤立したテンペル同士も間もなくローマの進んだ土木技術の影響で堤防が結ばれていった。
- ② 13 世紀にはいると、人口増加に対処するため、積極的に浅い湖沼や海の入江を堤防で囲って、排水して陸地を増やそうとした。しかし、しばしば襲ってくる大洪水に稚拙な堤防は簡単に決壊し、人命や財産に大打撃を与えた。それにノルマン人の来襲であった。水や外敵との闘いで地勢的に水に阻まれた大集団の結成は難しかったために、君主が君臨する王国が生まれず、民主的な小集団が組織された社会が形成された。原始的な干拓地はライン川やマース川が運んだ有機物に富んだ肥沃な土地で、ここから小麦、ライ麦などの農産物が収穫され、人口増加が可能となった。
- ③ 16 世紀になると、排水作業に風車が使われ始めて干拓が急速に進み、飛躍的な農産物の増産をもたらした。

この農業によって蓄積された国力が 1568 年から 1648 年に及ぶ 80 年間にわたる対スペイン独立戦争を闘い抜くことができた。

- ④ 19 世紀には風車に代わって蒸気機関が導入され、干拓のピッチが急速にあがり、1900 年までにちょうど和歌山県位の面積 4,700 平方キロが干拓された。
- ⑤ 20 世紀に入ると、北海から深く国土に入り込んだゾイデル海の締切と内海となったアイセル湖の干拓事業が始まった。漁業関係者などの抵抗もあったが、この締切りの決め手は、1911 年、1916 年に襲ってきた大洪水であった。「北海の細い腕」と言われたゾイデル海の封鎖は、そのすばまった首の部分で約 30 キロに渡って締め切られ、完成した堤防はアフスライト・ダイクと名づけられた。現在は、四車線の高速道路がまっすぐ走っている。この締切工事は、1927 年から始まり、毎日 4~5,000 人で行われ、5 年後の 1932 年に完成した。これは当時のオランダ人の執念の賜物である。締め切り後、湖内には、四ブロックに分け、1,400 平方キロが干拓され、農業を主として工業、住宅、自然保護、レクリエーションなどの多角的に利活用されている。

(3)ヤコブ・フォッセスタイン著・谷下雅義編訳『オランダ 水に囲まれた暮らし』(中央大学出版部・2017 年)の書がある。



この書の内容は①外国人からみたオランダ②オランダのシンボル 水に囲まれた暮らしの全体像③オランダデルタの起源④海がつくり出したホラント⑤遠い北部⑥海面下の半島 北ホラント⑦ゾイデルからアイセル湖へ⑧ホラントの中心部⑨オランダの河川⑩南西部の島々⑪未来 からなっている。

訳者の谷下氏は、様々な施設について、人工物が決して目

立たないということ、土、岩そして柳や氷礫土といった自然素材が基本となっていること。もちろんデルタ計画でつくられた巨大な(可動式)防潮堤にはコンクリートやスチール使われている。しかしそうした施設の周囲には人口密度が低く、日常的に構造物を感じると言うことはない。

冬の風の強い日であっても、ウォータースポーツのみならず、乗馬、サイクリング、犬の散歩、子供や仲間との散歩など、実に多くの人が海辺や水辺を利用している。車が排除されたシティセンターには 400 を超える博物館や学習施設などあわせて自分たちの生活の場を大切にしているという。

(4)武田史朗著『自然と対話する都市へ オランダの河川改修に学ぶ』(昭和堂・2016 年)は、1996 年にオランダが決断した河川改修「ルーム・フォー・ザ・リバー(川のための空間)」について、述べている。



- ① この始まりは、1990 年代に二度にわたってドイツやフランスそしてオランダを襲った 150 年に一度の高水位だった、オランダは国土の半分の標高が海面下であり、当然これまで多大な投資によってダムや堤防の建設・強化がなされてきた。しかし、このときの水は、危なくその堤防を越える所であった。
- ② このことをふまえて、洪水を起こさない強い堤防づくりから、氾濫と共存する、より広い河川敷づくりへとシフトするものである。それまでオランダは、川幅を最小限に抑え、堤外の高水敷を農地として利用するなど高度な土地利用を行ってきた。しかし今は川幅を広げ高水敷を氾濫原に戻し、新たなバイパスを設ける河川の拡大工事が進められた。2015 年現在ほぼ完了した。

- ③ 流域の 34 ヶ所において、堤防改良、氾濫原の掘り下げとひき堤、水制の低下などを行なった。事業の目的は治水だけでなく、河川と沿岸の地域における「空間の質」の向上を含むものである。単なる治水事業でなく、市街地や郊外における新しい地域づくりを含む、壮大な国土計画であった。オランダの河川には将来にわたって流下能力の絶対的増大求められていることと、干拓地の多い地盤沈下とさらには気候変動への対処することである。

(5)アムステルダムについては、ヘルマン・ヤンセ著/堀川幹夫訳『アムステルダム物語 杭の上の街』(鹿島出版会・2002 年)、岩井桃子他編著『水都アムステルダム 歴史的経験と未来へのチャレンジ』(法政大学院エコ地域デザイン研究所・2007 年)の書がある。

以上、オランダの治水の歴史に述べてきたが、今日の日本の状況に対し、いくつもの教示を与えてくれる。日本もオランダの治水の根本において「空間の質」の向上を図る時代になってきたと思われる。

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

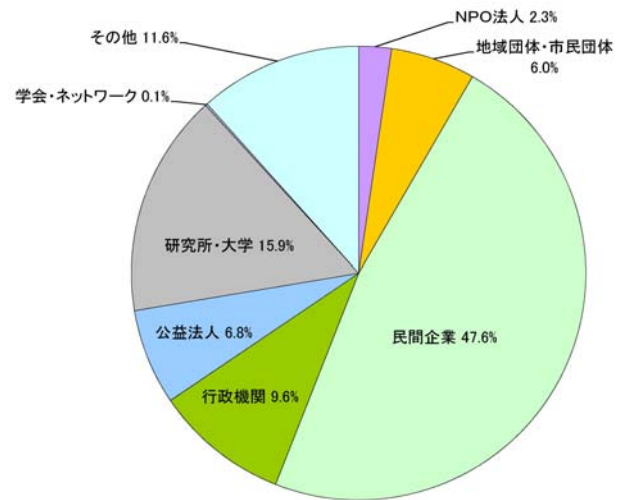
会員登録をされた方々へ様々な「会員特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2019 年 3 月 31 日時点の個人会員の所属構成
(個人会員数：794 名、団体会員数：60 団体)

※3 月の新規入会数： 個人会員 1, 団体会員 1

JRRN 会員特典一覧表（団体会員・個人会員）

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 NMF 茅場町ビル 7 階 (公財) リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3865 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>